

リレー随筆

「ア　ン　テ　ナ」

鹿児島大学病院 血液・膠原病内科 高木 博佑

リレー随筆の依頼を受けたのは12月の末、忘年会にて。来年の新入局員からの頼みでは断れまいと引き受けたものの、年末年始の多忙にかまけてすっかり失念していた(見て見ぬふりをしていた、わけでは、ない...)わけだが、病院へ原稿の締めきりを知らせる電話が鳴る。売れっ子作家にでもなったような気分浸れたのもつかの間、すでに締めきりを過ぎていた。

友達2人との会話。物心ついた頃、とは言わないまでも子供のころからずっと欠かさず続けていることがあるか、という話題になった。しばらく考えて友達2人の答えは「ジャンプの立ち読み」であった。ファーストインプレッションはおそらくみなさんと同じく、くだらねえ！というものだったが、もうしばらくして私は頭を抱えた。そして顔をあげると、いつもの2人が輝いてみえた、気がした。と、いうのもなんとなく人生を振り返ってみても自分にはそんなものなかったからだ。ジャンプの立ち読みのようなくだらない(今ではもはや高尚なものと思っている)ことすらも、だ。むしろジャンプの立ち読みに関してはしたことがない(ヤングジャンプはしたことがある)。この2人は想像するに雨の日も風の日もジャンプの発売日となれば関係なくコンビニへ向かうのだろう。この数十年の中ではもちろん配送が遅れて空振りする日、先週号が合併号だということを忘れて、なんか既視感あるなあ、と一瞬考え込んだあとにす

こし不貞腐れながら帰路につく日もあったに違いない。いや、決して馬鹿にしているわけではないのです。言われてみれば今日ジャンプの発売日だからコンビニ行ってくる、という会話を耳にすることは多かったように思える。さて、自分の話。熱しやすく冷めやすい性格が災いして一途に好きなもの、一途に続けているものはなく、大概がマイブームとして過ぎ去っていく。いわゆる趣味がない。ただ、一度火がつくととにかく調べる、調べこむ。コーヒーに興味がわくと一番品質、コストパフォーマンスなど加味した豆やコーヒーミルを調べ、自転車、ゲーム、水泳、ビール、椅子、ファミレス、キャンプ...なども同様に。このうち本当に買ったりやったりするのは半分くらいで、今でも使ったりやったりしているものはほんの一握りか。こうなってくるともはや調べることが趣味のような領域に入ってくるかもしれない。趣味：google、である。ここで少し頭を冷やすと、欠かさず続けていなければ趣味と言っではいけない、なんて誰も言っていないじゃないかということに気づく。どうも思い込みが激しい。いわゆるにわか、と思われることに激しい抵抗を示しているようだ。自分より好きな人、詳しい人がいるものを趣味と呼ぶことは何も悪いことじゃないじゃないか、と改めて思い直す。一瞬話が外れるがこういう話をして後輩に「そんなこと考えていると生きづらくないですか？」と比較的クリティカルなツッコミをされたこ

とがある。閑話休題。テレビとラジオは趣味と言ってもいいかもしれない。小学生の頃に一番仲の良かった友達が教えてくれたのがテレビとラジオだった。もちろんバラエティー、お笑い。めちゃイケ、電波少年、笑う犬、オールナイトニッポン...と書いているだけで心が震えるようなものばかり。テレビはなんとなく見ていることもあったが、ラジオはとにかく新鮮だった。猿岩石日記を読みながら私に割り算の筆算を教え、小学生にしてビビるのオールナイトニッポンでネタが読まれていたその友達が今の私を作り上げているといっても過言ではないかもしれない。彼に最後にあったときは広告代理店に勤めており、奇しくも最初のターゲットになった私は、世の中こうやって作られていくのだと痛感させられた。今は何をしているのだろうか、もっと面白いことをしているに違いない。オールナイトニッポンは特に好きで小学校の頃はゆずのオールナイトニッポンスーパーを毎週聴いていた。前述のビビるのオールナイトニッポンは3時からの放送だったので聴けるわけもなく、今思うと彼はいったい何時に寝ていたのだろうかかと心配になる。録音していたにしても当時はタイマー録音機能のついたようなラジカセもそんなにあったわけではないだろうし...ちなみにもちろんカセットテープである。オールナイトニッポンスーパーは22時からの放送だったのでなんとか生で聴けていた。祖父に買ってもらった携帯ラジオを風呂に持ち込み聴いていたが、手を滑らせて風呂に落として壊れてしまったからはラジカセで寝ながら聴いていた。風呂に落としてしまったときにすぐに拾い上げて乾かせばいいものを、怒られる、と思ったのかなんなのかわしる深く沈めてラジオから泡がポコポコでるのを眺めていた光景は今でもたまに思い出す。泡が出なく

なってから拾い上げたもののもちろん音は出なくなっていた。小学生は一体何を考えているかわからない、というより少し怖い。ゆずのラジオは今のゆずからは想像できないようなネタばかりで、ラジオ本もでているので気になる人は要チェックだ。今でも読み返すと普通に笑える内容になっている。中学校になると彼とは少し疎遠になるが、中学時代に一番仲の良かった友達もラジオが好きだった。最初の会話もふと私がつぶやいた一言がラジオのネタで、それを聞いた彼から話しかけられたのがきっかけだった。中学時代も22時台の西川貴教、ロンブーのオールナイトニッポンスーパーはもちろん、受験勉強の名のもとに24時からのLIPS PARTYも聴き始め、2人のブームになっていた。m-flo、品川庄司やキンモクセイを知ったのもこのラジオからだった。特に2人でハマったのがMILKRUNというもはや誰も知らないバンドでよくネタにさせてもらっていた。中学の卒業アルバムで彼が私のアルバムと勘違いして特に仲良くもない女子のアルバムの寄せ書きコーナーにMILKRUNと書きまくったというのも懐かしい話である。彼とは高校が別々となるが、高校時代に一番仲の良かった友達もなんとラジオが好きだった。この頃からようやくラジオのゴールデンタイムこと25時からのオールナイトニッポンを本格的に聴くようになる。ナイナイのオールナイトは他のラジオが霞んでしまうレベルのおもしろさで、これまでなぜか聴いてこなかったことを恥じる程だった。毎週金曜日は学食で彼と前夜のネタを振り返るのが日課であった。ナイナイのオールナイトに限らずラジオを聴くことがライフワークとなっており、この頃からは松浦亜弥の番組も含め毎日オールナイトニッポンを聴いていた。ミニコンポが家に来てからは更にその生活は加速した。

マンション住まいであり角度の問題が付属のアンテナではAMの電波を拾いにくかったため、よくわからないネットショップでバカでかい室内アンテナを購入し部屋中にアンテナ線を張り巡らせた。タイマー録音も可能となり、長崎では27時から放送されていたB-JUNK(その後JUNK 2へ名称変更)も録音可能となった。何よりMDになったことが大きかった。この前に使っていたラジカセでのテープ録音は、オートリバース機能がなかったため、2時間の番組を録音する場合は120分テープのA面をセットし、1時間後に自分でB面にひっくり返さなければならなかった。そんなわけで1時間起きていられず録音失敗、ということが多かったが、MDではそんな失敗もなくなりとにかく感動したものだ。暇さえあれば毎日ラジオを聴いていた。勉強を頑張れば27時からのラジオを生で聴くこともでき満足感も高かった、もちろん勉強の質は問わず、だが。というわけで浪人するはめになる。予備校は地元の北予備だったため、中学時代の彼と再会することになった。予備校時代も趣味を通り越したラジオライフは変わらず、この頃はくりいむしちゅーがブームとなった。翌年には大学に入り、鹿児島での一人暮らしが始まった。いくら夜更かししようが、スピーカーからラジオを聞こうが迷惑かけず、何も文句を言われない環境。ラジオライフも広がる...かと思いきやパタリと聞かなくなってしまった。自分専用のパソコンという新しいアイテムを得たことから興味はyoutube、ニコニコ動画など動画へ移行してしまったのだ。それよりもなによりもサークルや飲みなどが楽しく自然とラジオから距離をおいてしまったのだらう。こうして振り返るとラジオは何か抑圧された環境や鬱屈とした心情でこそ輝くものだと思うされる。実際ラジオを聴いて

いた奴は比較的少数で、なんだかこう、言い方が難しいがそいつらには陰があった。そしてお互いなかを感じるものがあり惹かれ合うのだった。最近はradiko、podcastと媒体が広がり再びラジオを聴くようになった。長崎では聴けなかった伊集院光、爆笑問題のJUNKなどの商業ベースのラジオだけでなくウエストランドやエル・カブキの配信番組など新しい形の放送も楽しめる。以前のようなドキドキ、ワクワクしながら25時を待つような楽しみ方はできなくなったものの、小学生の頃のように風呂に入りながら、そして中学、高校生の頃のように勉強しながら、寝ながらラジオを聴いている。趣味：ラジオ。くだらないが悪くない。

次号は、鹿児島大学病院血液・膠原病内科 市来航史先生のご執筆です。
(編集委員会)